

島根県・中海の大根島における生業の変遷

——戦後の牡丹苗行商を生み出した背景——

山 本 志 乃

YAMAMOTO Shino

はじめに

島根・鳥取県境に位置する汽水湖の中海は、西側の大橋川で宍道湖と、東側の境水道で日本海とそれぞれ接し、1960年代に干拓事業が本格化する以前は、多種多様な水産物に恵まれた、特異な水辺環境を作り出していた。

その中央に浮かぶ大根島は、約6 km²の面積に、近代以降は常に5000～6000人ほどの人口を有し、人口密度の高さが特徴のひとつとなっていた。水田はほとんどなく、畑での換金作物と中海の漁業を主な生業とするが、いずれも小規模であり、島外への出稼ぎや行商による現金収入が生計維持のうえでは重要な意味を持っていた。なかでも戦後の高度経済成長期に登場した牡丹苗行商は、島の女性のほとんどが従事するほど盛んであった。

米や燃料を島外から買わなければならないという環境が、大根島の行商を活発化させた要因のひとつであることは確かである。島の人たちは、その貧しさゆえ行商に従事せざるを得なかったことを口にするが、本当に貧しいなら、そもそもそれだけの高密度の人口を抱えることができるのかという疑問がある。

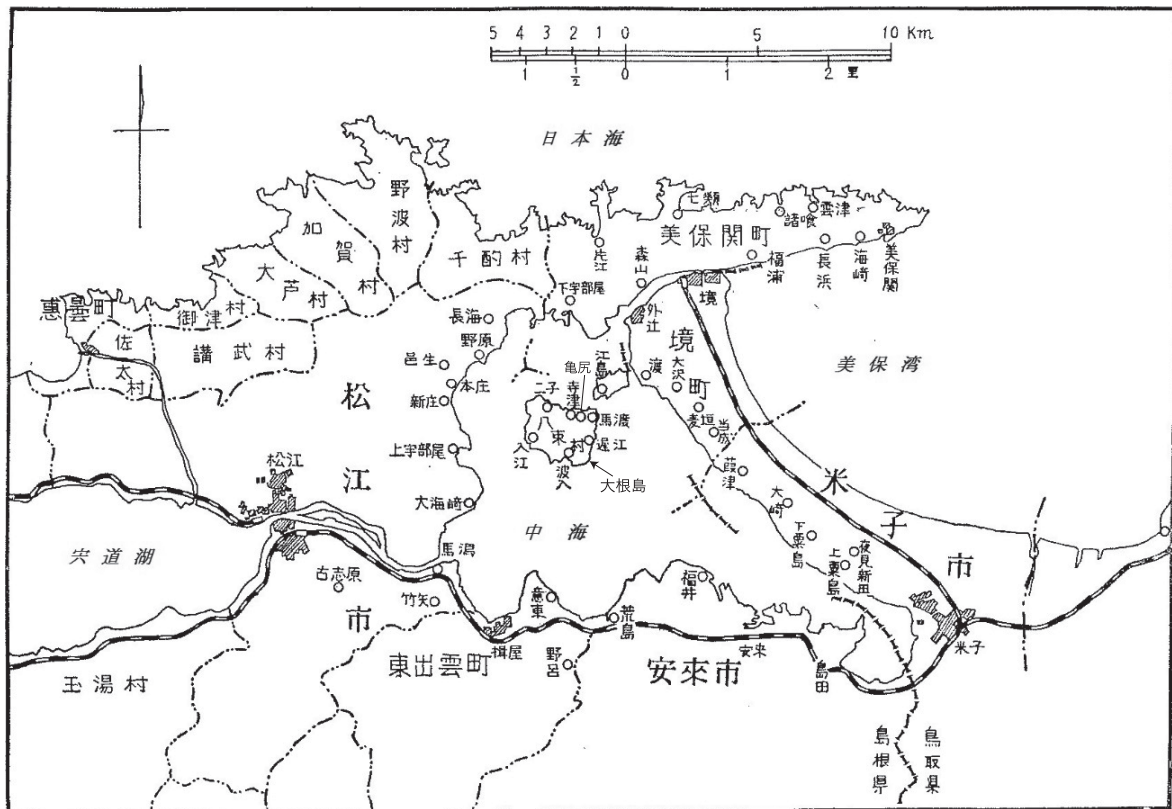
従来、行商は、農業や漁業といった主たる生業を補う、あるいは余剰を換金するための零細で副次的な生活手段として位置づけられてきた。大根島においても、米や燃料を自給できないということが貧しさのイメージの根本にあり、それを克服するために選択されたのが行商であるという認識が固定化している。

しかしこの島では、すでに藩政期から商品価値の高い換金作物の栽培が定着し、加えて多種多様な漁獲物にも恵まれた環境にあったことから、商業を主体に生業を組み立ててきたことが予想され、行商の位置づけもその延長線上で考える必要がある。

このような問題意識に立ち、本稿では、主として1956年に刊行された『八束村誌』(中国地域社会研究会編)⁽¹⁾を参考に、花卉栽培が登場するまでの大根島の生業の変遷を整理し、その後隆盛となった牡丹苗行商を生み出した背景を明らかにすることを目的とする。

1 大根島の概要

大根島(島根県松江市八束町)は、隣接する江島(同)とともに、島根県と鳥取県の県境にある中海に浮かぶ島である。1960年頃から本格化した中海干拓事業に伴い、1970年代にかけて架橋や堤防



中国地域社会研究会編『八束村誌——科学的村誌への試み』(1956年)掲載の図をもとに筆者加工

地図1 架橋以前の大根島・江島とその周辺地域 (1956年頃)

工事が進められ、1979年に陸続きとなったが、それまでは離島であった(地図1参照)。

8世紀中葉に成立した『出雲国風土記』には、大根島が「蛸蛸島」、江島が「蜈蚣島」と記され、ともに島根郡に属していた。蛸蛸島は、出雲郡の杵築の御埼(日御碕)にいたタコを天の羽合鷲がさらって持ってきて、この島に留まったことに由来するといひ、土地が豊沃で、茅(チガヤ)・莎(ハマスゲ)・薺頭蒿(ヨメナ)・蓴などが生い茂り、牧があったとされる。蜈蚣島は、先述のタコがムカデをくわえてきてここに留まったことが由来とされ、同じく土地豊沃で、桑や麻が豊かであり、人家があったと記されている。

この蜈蚣島から、伯耆国の夜見の島(鳥取県西端の弓浜半島)までは距離がわずかで、馬に乗ったまま往来でき、干潮時には陸地同様になるほどであったとされる。また中海は「入海」と表現され、イルカ・サメ・ボラ・スズキ・コノシロ・クロダイ・シラウオ・ナマコ・エビ・ミルなどのほか、名前を挙げきれないほど多種類の産物があったことが記されている。

『出雲国風土記』には、この中海と穴道湖を結ぶ大橋川河口部にあったとされる「朝酌の促戸の渡」について、次のような興味深い記述がある。「是に捕らゆる大きき雑の魚に、浜譚がしく家闔ひ、市人四より集ひて、自然に酈を成す」。春と秋の漁期になると、大小さまざまな魚が浜に上がり、これを求める人びとが集まって、おのずと市が開かれるようになったという。促戸の渡は、現在の「矢田の渡」(島根県松江市矢田町)がある東側あたりと推定されている。このすぐ東に、「朝酌の渡」という公用の渡りもあり、出雲国庁と日本海側の千酌駅とを結ぶ公道が通じていた。これらの記述から、大根島のある中海周辺は、古代からすでに水陸をつなぐ交通の要所であったこと、そしてまた、

豊かな水産物にめぐまれ交易の拠点ともなっていたことがうかがえるのである。

「大根島」の名称については、先述した『出雲国風土記』にある「蜆蛸島」からの転化とする説や、島の古名を「たくしま（栲島・多久島・焼島）」とし、その俗称であるという説、大根の名産地であったことに由来する説などがあるが、いずれも明確ではない。ただし、戦国時代末期にはすでにこの呼称が使われており、その頃には集落も形成されていたようである。

近世には、大根島内に、^{はにゆう}波入・^{にゆうこう}入江・^{おそえ}遅江・^{ふたご}二子・^{てらつ}寺津・^{かめじり}亀尻・^{まわたり}馬渡の7村があり、江島には江島村があった。これらの村名は現在の大字名である。その後、1889年（明治22）の町村制施行に伴い、波入・入江・遅江は波入村、二子・寺津・亀尻・馬渡・江島は二子村となった。さらに1929年にこの2村が合併して八束村を形成、1970年に町制が施行されて八束町となり、2005年にいわゆる平成の大合併によって松江市に編入された。

島の地形は、中央に位置する標高42mの大塚山を頂点に、緩やかに傾斜して中海に至る。そのため、遠方から眺めると、皿を伏せたように平坦な姿をしている。火山灰質の腐植土で覆われているため土地は肥沃で、1950年代半ばにおける耕地率は約65%と高く、住宅地を除く島のほとんどが開墾されている状態といつてよい。

ただし水田は、沿岸部のわずかな平坦地に点在するほか、江島に近世の開拓新田がかろうじてある程度で、それらを合わせても全島面積の10%にも満たない。したがって、とくに大根島に関しては、耕地はほとんど畑であると考えてよいだろう。

1950年の農林業センサスによると、当時の八束村（大根島と江島）の農家数は計861戸であるが、経営規模は、1町未満が91%、5反未満に限っても65%と、全体的に小さいことがわかる。

このことに関連するのが、大根島の特徴ともいえる人口密度の高さである。1872年（明治5）の統計で、すでに1km²あたり745人を数えており、大正から昭和初期にかけては約870~890人、そして戦後の1950年には990人という数字が記録されている。島根県の平均が約110~130人、全国平均でも、昭和の戦前期には190人前後、1950年には約220人という数と比べると、その差が歴然としている。

江戸時代の村に相当する各集落は、島の周囲の沿岸にそれぞれ形成されている。1631年（寛永8）の検地帳に先述した8村の名が見え、二子の地神神社には1510年（永正7）、入江の三所神社には1553年（天文22）の棟札が見られることから、集落の形成そのものはさらに遡ると考えられる〔中国地域社会研究会 1956：62〕。

大根島東部の馬渡・遅江、そして江島を除く5村には、中海沿岸近くにカワと呼ばれる自然の湧水があり、戦後になるまで生活用水として利用されていた〔中国地域社会研究会 1956：65〕。この湧水の存在は、集落形成のうえで重要な条件となっていたと考えられる。また、それぞれの集落には船着場が設けられている。先の湧水に加え、海岸線が適度に湾を成し、船の係留に都合のよい場所を中心として、集落が形成されたとも考えられるのである。この地域では、ソリコ船とよばれる丸木船をはじめ、小型の船が古くから用いられてきた。用途は、赤貝・ウナギといった中海での漁のほか、肥料用の藻の採取、対岸への交通手段などで、中海に囲まれた島の生活には、船が不可欠であった。

大根島中央部には、近代以降に掘抜き井戸の技術が普及した後、役場や学校が建設されたが、現在に至るまで人家はほとんど存在していない。こうしたことから考えても、島を取り囲む中海と、その対岸地域との関わりを強く保ちながら、島の生活が営まれてきたことをうかがうことができるのである。

2 薬用人参と養蚕

大根島が、すでに明治期には開墾しつくされた状態にあり、そのうちの大半が畑で占められていることは先述したとおりである。

大根島の畑では、比較的商品価値の高い作物が栽培され、これを現金化することで生計を成り立たせてきた。戦後になって本格化した花卉栽培もそのひとつであるが、商品作物の栽培には時代による変遷があり、初めから牡丹苗をはじめとする花卉類が栽培されていたわけではない。ここでは、藩政期以来の歴史をもつ薬用人参の栽培と、近代以降に大きな収益をもたらした養蚕業ならびに桑の栽培に焦点をあて、大根島における商品作物栽培の経緯とその背景を明らかにする。

大根島で薬用人参の栽培が始められたのは、天保年間（1830～1844）であるとされる。松江藩による人参栽培は、6代藩主松平宗衍による財政改革の一環として、1745年（延享2）頃から着手されたが、改革の挫折などから中断し、文化年間（1804～1818）に再開されて以降、藩財源としての定着を見た。大根島は、水田が乏しいため年貢徴収が難しい土地柄であったが、この人参栽培に適していたため、島内に藩直轄の御手畑が作られ、島民がこの作業に従事することとなった〔中国地域社会研究会 1956：169-170〕。

御手畑は、農民が畑数を出願し、それに応じて種子が下賜される。その生産品を藩に納入するという形になっており、出願可能な畑数は、最初は1戸につき3畑、後年になって20畑まで許可された〔中国地域社会研究会 1956：366〕。なお、人参畑には屋根（縦3尺×横7尺）をつけるが、この屋根6枚をもって1畑と称する。したがって、1畑の大きさは縦3尺×横42尺で、細長い形をしている。1畝の畑地におよそ6畑の人参畑ができるといわれる〔中国地域社会研究会 1956：384〕。島内には、幕末期におよそ500畑があったとされている。

明治維新後の廃藩置県により松江藩は廃止されたが、1872年（明治5）まではそれまでの人参方に代わる会計本局人参課が置かれて、県の専売が続けられた。同年7月、大蔵省からの指令で民営への移管が決まり、島内や周辺地域の商人数名が払い下げを受けたが、個人の独占に対する反対が大きく、結果的に1874年（明治7）以降、島民の手により複数の人参会社が設立されるに至った。人参栽培は、景気の変動に左右されやすいという弱点があるが、明治20年代になると生産も安定し、その後1898年（明治31）には大根島を中心に県内の業者で雲州人参同業組合を発足させるに至った。ただし、主要な販路が清国への輸出であったため、日清戦争勃発により、明治20年代後半をピークに生産額は減少した〔中国地域社会研究会 1956：171-174〕。

大根島の人参栽培は、その後昭和の第2次世界大戦を経て、戦後の高度経済成長期になって再び増産となるが、これについては牡丹苗の栽培と行商に直接関連するため、稿を改めることとしたい。

薬用人参と並んで、かつての大根島を支えていた基幹産業のひとつが養蚕である。

大根島における養蚕業は、1888年（明治21）に島内の規模の大きい農家が1町あまりの桑畑を開き、1890年（明治23）、寺津に養蚕伝習所を設置したことで本格的に始まったとされる。翌年には、波入・二子両村に養蚕組合が組織され、巡回教師が置かれて監督にあたった。当初は春蚕のみであったが、明治30年代には秋蚕も飼育し、旧波入村だけでも全戸数の67%にあたる390戸が養蚕に従事するまでになった。その後、大正から昭和初期にかけてさらに増大し、1930年の記録では、島内の

桑畑が約 315 町歩、県下第 1 位となっている [中国地域社会研究会 1956:370]。

戦時中には食料増産のため、麦やイモの畑に変わったが、戦後 1950 年頃から再び桑畑が増えた。表 1 は戦後における八束村（1970 年からは八束町）の養蚕業の推移を表したものである。1960 年頃までは、農家のうちの 5~6 割ほどが養蚕に従事していたが、1960 年から 70 年のあいだに養蚕戸数も桑畑の面積も半減しており、その後衰退はますます加速して、1980 年頃にはほとんど消滅したことがわかる。養蚕業は、近代以降の大根島における貴重な現金収入手段であったが、1970 年代後半にその役割を終えたと考えてよいだろう。

表 1 大根島・江島における養蚕業の推移

西暦	総農家数(戸)	桑園のある農家数(戸)	桑園の栽培面積(ha)	養蚕農家戸数(戸)
1950 年	861	499	131.6	406
1960 年	817	450	130.8	411
1970 年	721	308	70	250
1975 年	679	93	14	45
1980 年	607	7	1	1

(農林業センサスより作成)

大根島における農家の経営規模が総じて小さいことは先述したとおりだが、1970 年の実態を集落別にみると、島南部の入江・波入・遅江の各集落に比べて、島の北部にあたる馬渡・亀尻・寺津・二子の各集落のほうが、1 町以上の比較的経営規模の大きい農家がやや多い [関西学院大学地理研究会 1981:66-67]。島の農家は多くが兼業で、複数の生業を組み合わせる生活を作り立ててきたが、北部地域はどちらかといえば農を主とした兼業であるのに対し、経営規模がより小さい南部地域では、漁や行商への依存が大きい傾向にあったことがこれまでに指摘されている [関西学院大学地理研究会 1981:67]。

3 中海の漁業

中海は、大橋川、飯梨川、伯太川、意宇川などの河川が流入する一方で、北側の島根半島と東側の弓浜半島の間にある境水道をとおして、日本海の海水が潮汐によって流入出する汽水湖である。湖底は比較的平坦で、水深は平均 5.4 m、もっとも深いところ（大根島の南東、弓浜半島の西側）でも約 8 m であり、汽水湖一般がそうであるように、肥沃で生産性も高い。海と河川両方から生物が入り込み、複雑かつ豊富な生物相を有するという特徴がある [伊達他 1984:2-5]。

1877 年（明治 10）における大根島・江島の船数は、漁船・荷船あわせて 816 艘が数えられており、全戸数が 925 戸であることから、ほとんどの家が漁船ないし荷船を有していたことがわかる [中国地域社会研究会 1956:132-133]。中海では江戸時代から、地先は各村の専用漁場、その他一円を沿海各村の入会とする慣行が存在したことをあわせて考えると、島民の多くが漁に従事していたと推測できる。明治末期から大正期にかけて、赤貝などの養殖場が地先の専用漁場に作られたものの、それ以外は基本的に入会であった⁽⁴⁾。

大正から昭和初期は、漁船の動力化が進んだ時期であるが、1929 年における八束村の漁船 432 艘はすべて無動力船で、1936 年でも、359 艘中 21 艘（5.8%）が動力化したにすぎない。島根半島北部の日本海側で、同年の動力化率が 16.6% であるのに比べると、極めて低いことがわかる [中国地域

社会研究会 1956：226-227]。この傾向は戦後になっても変わらず、1954年の第2次漁業センサスによると、漁船数343艘のうち、無動力船が273艘で、動力化率は約20%に留まっている。したがって、経営規模は概して小さく、1953年の1漁船あたりの漁獲高は1万8000円あまりと、島根県の平均の10分の1以下になっている。

同じく第2次漁業センサス（1954年）による八束村の漁家数は307戸で、このうち専業は10戸、漁業を主とする第1種兼業は77戸、残る220戸（71.7%）が農業を主とする第2種兼業である。また、表2に示したとおり、307戸中の205戸が採貝・採藻への従事となっている。

中海沿岸地域では、畑作の肥料用に、中海の藻葉を採集して利用する習慣が江戸時代からあった。中海に生育する藻葉は、オゴノリ・ボウアオノリ・ウミトラノオ・アマモ・コアマモなどで、季節によって発生する種類が異なるので、年間を通して採集が可能であった[檉村 2011：38-47]。山林がなく、島のほとんどが畑作地で占められている大根島においては、中海での肥料藻の採集は必要不可欠であった。そのため、農家の多くが船を有し、小規模な漁を並行させつつ、藻の採集を行っていたのである。

1952年頃に中海で漁獲のあった水産物とその漁期は、表3のとおりである。漁の種類としては、網漁（引網・刺網・定置網・巻き網・かご網・すくい網など）、延縄、磯見、桁引き、潜水などがあり、サヨリはすくい網、ボラは刺網、チヌ（クロダイ）・サヨリは延縄など、魚種によって使い分けられていた[檉村 2011：32-35]。いずれも小規模ではあるが、多種多様な水産物にあわせ、漁の種類もまた多様であったことがわかる。

表2 大根島・江島における種類別漁家数（戸）

	総数	無動力	有動力*
総数	307	238	69
その他の刺網	28	15	13
その他の釣、延縄	73	52	21
採貝・採藻	205	171	34
その他の漁業	1	0	1

※その他の刺網の1戸以外、すべて1トン未満

（第2次漁業センサスより作成）

表3 中海の主な水産物と漁期（1952年頃）

名 称	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ボラ				○	○							
スズキ				○	○	○						
ウナギ				○	○	○						
ヒイラギ(エノハ)		○	○									
メバル		○	○	○	○	○	○	○				
クロダイ				○	○	○						
ハゼ							○	○	○			
シラウオ									○	○	○	
コバイワシ		○										
アミエビ	○	○										
エビ					○							
カニ					○							
モガイ(赤貝)*1					○				○	○	○	○
カキ*2	○									○		
オゴノリ		○	○	○	○							

※1 モガイは人工採苗で、8月に採苗する

出典：中国地域社会研究会編『八束村誌』1956年

※2 カキは筏による垂下式養殖で、12月～3月に垂下、約1年後に採取する

モガイ（藻貝）はこの地域で赤貝とよばれ、中海の特産として知られていた。赤貝の漁には、丸木舟の一種であるソリコ舟⁽⁵⁾を使う。採取のための道具としては、海底数センチのところにいる赤貝を掘り出すため、歯が下向きになった専用のケタが用いられた〔樫村 2011：33-34〕。中海の赤貝は、明治30年代からすでに養殖が試みられていたが、赤潮の発生や周辺の環境変化により、大正時代の中ごろには消滅に近い状態となっていた。1949年に八束村漁業協同組合が発足し、漁業制度が改革されるなかで、入江・波入・遅江の住民30～40名が共同出資し、八束村赤貝養殖組合を結成して新たな取り組みを始めた。また、1954年には、島の南対岸の東出雲町に本部を置く中海赤貝種苗組合も設立され、中海で育てた種苗を岡山・広島方面で養殖するという広域的な計画が立てられた。これを機に、中海漁業協同組合（本部は東出雲町）が結成され、八束村漁協はその支所となった。

こうした取り組みが相次いでなされた背景には、戦後急速に進んだ中海の環境悪化があった。終戦直後には、寒天の原料となるオゴノリが盛んに採取されていたが、1950年代半ばにはほとんどなくなり、魚類の減少も著しくなった。唯一の打開策として計画されたのが、赤貝養殖の再興だったのである。

中海のように、湖水が停滞しやすく、栄養塩類に富んで生産性の高い水域は、汚濁によって傷つきやすいという特徴がある〔伊達他 1984：5〕。戦後復興から高度経済成長へと向かう社会変化の中で、中海周辺地域の生活環境の変化が、結果的に中海の水質悪化となって顕在化することとなった。

中海での漁は小規模ではあるが、大根島・江島の住民の多くがこれに携わり、生活の一部を構成する重要な要素であった。中海の環境の脆さは、そうした住民に大きな失意を与え、その後本格化する干拓事業を受け入れざるを得ない状況へと追い込む結果となったのである。

4 交通路の変遷

大根島・江島を取り囲む中海は、波もほとんどなく穏やかで、かつては豊かな漁場であるとともに、人や物を運ぶ道でもあった。島の人たちの多くは小さな船を持ち、必要に応じて対岸各地にでかけた。明治期には帆をあげ、櫓漕ぎであったようだが、1935年頃から焼玉による発動機がとりつけられた船が登場するようになった。そのエンジン音から「ポンポン船」とよばれ、戦後も島民の足として活躍した。

鳥取県から島根県にかけての日本海沿岸は、冬期の悪天候や砂浜などから良港が得られにくい条件下にあるが、中海と宍道湖の一带に限っては、江戸時代から水上交通が盛んであった。明治中頃には汽船の運航が始まり、中島汽船部（中島丸）・野波鉄工所（安政丸）・星野甚兵衛の汽船会社（松江浦丸）・平田蓬萊社（蓬萊丸）・米子汽船（加茂川丸）などの汽船会社が相次いで設立され、互いに競争が激しくなった。そこで1907年（明治40）、前記5社が合併して合同汽船株式会社が設立された。鉄道開通前の最盛期には、松江を基点として、美保関線、安来・米子線、宍道・庄原線、秋鹿・平田線、恵曇線など各方面への定期航路が開設され、大根島はこれらの航路の寄港地となった〔米子鉄道管理局 1963：14〕。

合同汽船はその後、鉄道やバスとの競合で航路を縮小し、戦後の1960年頃には、松江・大根島・美保関と、美保関・境港の2航路で8隻の船を1日各6往復させていた。大根島には、波入と入江に

汽船乗り場があった。また1895年（明治28）設立の隠岐汽船株式会社が1933年に松江航路を開設し、美保関・境を經由して松江まで、隠岐丸を就航させた。

汽船ではこのほか、1884年（明治17）に大阪商船が、大阪と山陰各地を結ぶ航路を開設。大阪・馬関・境・安来間を運航し、境と大阪間を4日で結んだ。これは陸路で行くより3日早かった。翌年には、日本郵船が小樽・新潟・敦賀の路線を境まで延長させ、これがさらに馬関・神戸へと延長された。これを利用して、1889年（明治22）の東海道線全通以後は、境・敦賀・米原を経て、大阪や東京方面へと、汽船と汽車を乗り継いで行くこともできるようになった。

さらに1905年（明治38）、阪鶴鉄道株式会社が、境・舞鶴間の定期航路を開設。同社はその前年に、舞鶴・大阪間の鉄道を開通させており、連絡船として境・舞鶴間の直航便とした。この航路は、その後の阪鶴鉄道の国有化に伴い、1907年（明治40）には国有鉄道の経営となる。これを利用した場合、境を午後4時に出航し、舞鶴に翌朝の7時到着、汽車を乗り継いで、午後3時には大阪に到着したので、大幅な時間短縮が実現した。便数も、当初3日おきであったものが、1908年（明治41）には毎日の定期運航となるなど、1912年（明治45）の山陰線全通まで、山陰と京阪神とを結ぶ主要な交通路として利用された〔有馬 2011：54〕。

このように、広域的な交通網が急速に整備されつつあった明治末期には、大橋川の東側に位置する馬潟港まで大型船を入港させるため、海底の浚渫が行われた。この浚渫は、大正から昭和初期にかけて大橋川でさらに大規模に行われ、結果的に宍道湖の塩分濃度を高め、塩害をもたらし、ひいては後述する中海干拓事業へと展開していくことになる。

戦後は、1963年頃に、松江・本庄・美保関・安来・米子各方面への定期便が、美保丸というディーゼル船で運航されていた。大根島の寄港地は入江であった。

このほか、馬渡と弓浜半島の渡との間の渡船も古くから利用されていた。1960年代頃には、渡回漕企業組合による定期便が運航され、朝から夕方まで毎時1往復程度の便数があった。船着場近くに住む個人が営業している渡船もあり、必要に応じて頼めばポンポン船で対岸に渡してくれた。

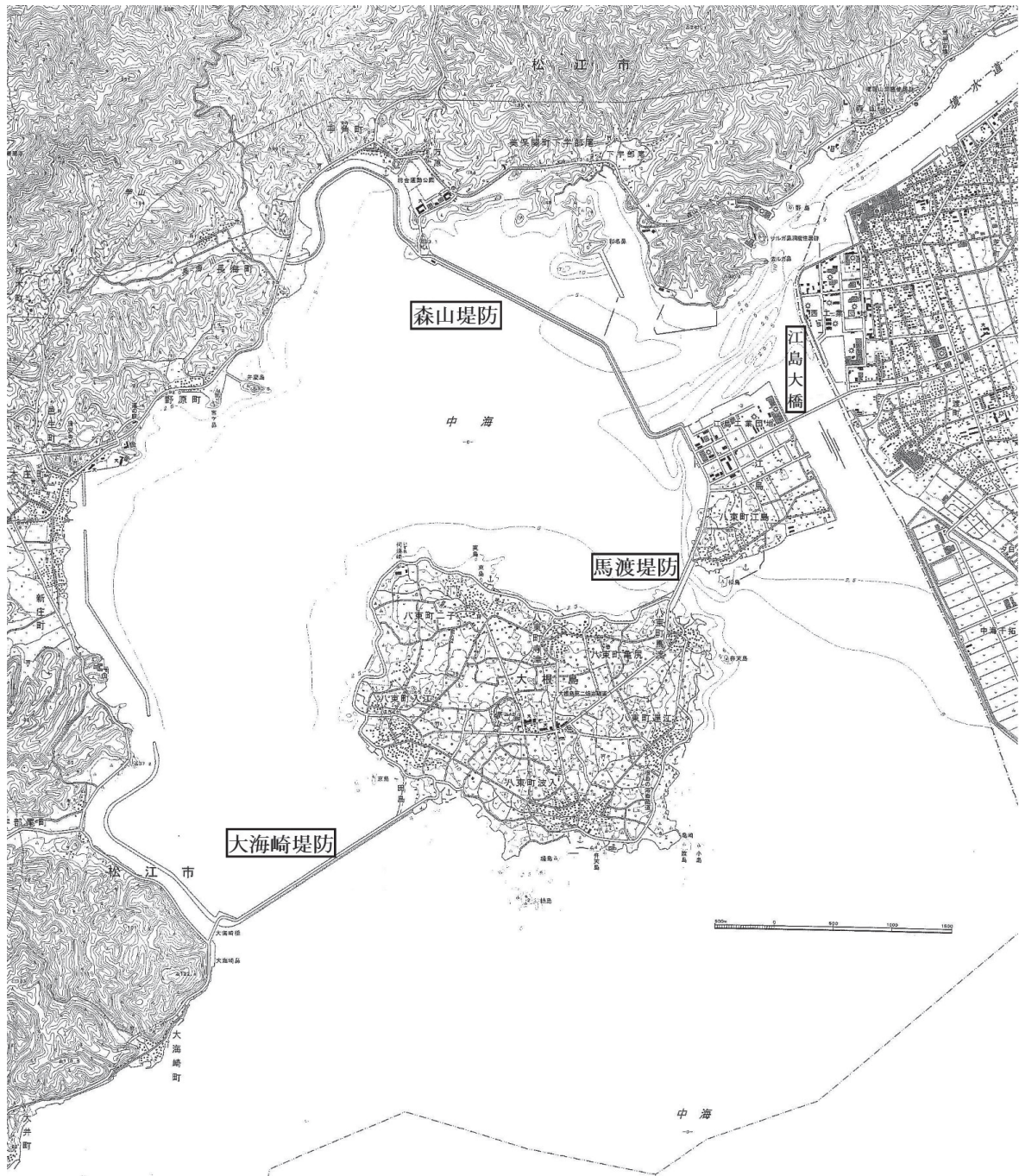
こうした船での行き来も、1968年から始まった中海干拓事業に伴う道路造成によって姿を消していく。

1954年、宍道湖・中海の大規模干拓と淡水化、並びに斐伊川の治水対策とを結びつけた斐伊川・宍道湖・中海総合開発計画が島根県により策定された。鳥取県でも同時に、中海埋め立てと弓浜半島の農業開発、さらに日野川の多目的開発も含めた総合開発計画を策定し、調査を開始した。この結果、1963年に農林水産省による「国営中海土地改良事業」が開始、1968年に着工となった〔檉村 2011：79-80〕。1974年、中浦水門道路橋が完成して江島と鳥取県側の弓浜半島が⁽⁶⁾つながった。1978年には、大根島の西岸から対岸に伸びた大海崎堤防の盛土工事が終わり、翌年には暫定通行が始まった。同じ年に、大根島と江島を結ぶ馬渡堤防も盛土工事を終えている。さらに1980年に、江島から北側の対岸に向けた森山堤防が完成した（地図2参照）。これら一連の工事により、大根島は、弓浜半島と松江の両方と陸続きとなり、水上交通による移動は終焉を迎えた。合同汽船の運航は、松江・大根島間で市営バスの運行が始まった1980年9月をもって中止された。

陸路では、1900年（明治33）10月に境・米子間で、翌年2月には米子以東で鉄道敷設工事が着手され、1902年（明治35）11月、山陰地方初となる官設鉄道が境・御来屋間で開通した。以後、東部

に向けて建設が進められ、1905年（明治38）には、青谷（鳥取県）まで開通している。翌年からは、さらに東へと敷設を進めると同時に米子以西の建設も着手され、1910年（明治43）には米子・今市間が開通、1912年（明治45）3月に、京都・出雲今市間を結ぶ山陰線が全通となった。それに伴い、舞鶴と境間に就航していた連絡汽船が廃止された。

山陰線の全通により、京阪方面との直通列車が運転されるようになり、この地域の人や物の流れに大きな影響を与えた。特に旅客面で、城崎・浜坂・東郷温泉への入湯客が急増したほか、同じ年に開通した大社線の影響もあり、出雲大社への参拝客が大幅に増大した〔米子鉄道管理局 1963：20〕。



国土地理院発行 25000 分の 1 地形図をもとに筆者加工

地図 2 大根島・江島周辺の架橋と堤防

5 小括

以上のことから、花卉栽培と牡丹苗行商が登場する以前の大根島における生活が、薬用人参と養蚕を中心とする換金作物の栽培と、中海での小規模な漁業を軸として、主に現金収入を得ることを目的に営まれてきたことを確認することができた。また、中海と宍道湖一帯は、山陰地方における希少な良港でもあったことから、交通路としての開発も積極的に行われ、その結果、戦後の干拓事業へと発展して、陸続きとなったことと引き換えに、漁場が失われることにもなった。

本稿では、1956年に刊行された中国地域社会研究会編による『八束村誌』を主なテキストとして、大根島における生業の変遷を概観したが、ここで同書が編さんされた当時の時代背景を、離島振興法との関連から最後にまとめておきたい。

1953年7月、本土と海で隔てられ、狭小で厳しい自然環境に置かれている離島の地域振興のため、離島振興法が公布・施行された。議員立法により10年間の限時法として制定されたが、その後も10年ごとに改正・延長が行われ、最近では2012年6月に改正と延長が実施されている。

この離島振興法は、一般的な過疎地域対策にみられる地域間の格差是正を目的のひとつとしてはいるものの、「我が国の領域、排他的経済水域等の保全」という文言が冒頭に記されていることからわかるとおり、戦後の復興期における国土保全や海洋資源の利用といった隣国との国際問題をも背景として制定されたところに特徴がある。そのため、対象となった地域は、北海道から九州に至る広範囲の近海と瀬戸内海全域、さらには北緯29度以北のトカラ列島にまで及び、約260の島々が「離島振興対策実施地域」に指定された⁽⁷⁾。

大根島と江島は、離島ではあるが内水面に位置するという理由から、離島振興法の対象とはならなかった。このことは、『八束村誌』の「序」にも明記されており、全国的に離島に対する施策が整えられるなかで、ここから除外されたことへの不安や焦燥感がうかがわれる。同書の刊行の背景として、地域の資源や文化の再発見によって独自の地域振興策を構築したいという動機があったと考えられるのである。

この前年に発行された島根県企画室による『大根島の実態調査』（1955年）は、離島振興法との関連に直接触れてはいないが、「町村振興方策の一例として」と副題に記されているとおり、地域の経済状態の現状分析をとおして、社会変化に即した地域振興対策の方針を見出すことを目的にまとめられたものである。「はしがき」には、八束村（大根島）が典型的な畑作地帯であり、経済変動の波を敏感に感受しやすいこと、それだけに村としての今後のあり方を真剣に検討しなければならないことなどの問題点が列記されている。

この報告書が書かれた当時、大根島の総人口は6017人（1952年）、農業を主に漁業を副業とする生業形態が主流で、村の総生産額1億4200万円のうち農産が85%を占めている。しかし、1人当たりで換算すると年に2万4700円となり、県平均の半分にも満たない状況であるという。また1戸当たりの生産額は12万1645円（1953年）で、戦前の半分程度に減少している。その原因のひとつとして、過剰人口の問題も指摘されている。

同報告書では、島の経済状態が窮迫してきた背景として、1953年頃から急激に漁獲が減少したことと、不況により農協機能が著しく低下したことを挙げている。また、経済状況には階層性が存在す

るとし、1町以上の耕地を所有する富裕層では比較的安定、もしくは上昇傾向にあるのに対し、耕地3反以下の零細農家がもっとも窮乏しているとされる。

分析の結果、5人家族の1年間の食糧を満たすだけの水田を2〜3反所有し、加えて月に1万円の現金収入を得る計算となる桑畑を5反所有したうえで、薬用人参と自給畑の栽培を行うことが、安定した経営の基準であるとしている。また、中海の漁業の将来性については、どちらかといえば悲観視されており、漁業の衰退による労働力の余剰と人口過剰が懸念されている。

これらのことを総合すると、1950年代半ばのこの当時、一定面積の農地の確保と、余剰労働力の消費という2点が、大根島の生活を向上させる重要な課題として認識されていたことがわかる。つまりは、前者は干拓事業へと通じる発想であり、そして後者は、出稼ぎや行商といった島外での労働へと通じる発想なのである。また、主として麦を作っている各家の普通畑の利用方法を再検討することも、課題のなかに見ることができ、その対策のひとつとして、当時少しずつ定着しつつあった花卉栽培への転換が可能性として提示されている〔島根県企画室 1955：31-35〕。

こうしてみると、1960年代以降、本格的に推進された干拓事業にしても、そして隆盛となった花卉栽培と行商にしても、時代の転換期にあった大根島において、離島という限られた条件のなかで、いかに自律的に島の将来像を構築すべきかという模索の結果見出された方向性であったと言い換えることができるのである。

大根島における牡丹苗行商は、1960年代から70年代にかけて隆盛となり、一時は500〜600人も島の女性がこれに携わった。その商売方法は、汽車を乗り継いで全国各地へと足を運び、場合によっては数ヶ月も家をあけて行商に従事するといった、他に類例を見ないほど規模の大きいものである。現在では、松江方面への日帰り行商に従事する人を数名残すばかりとなったが、かつての行商経験者が多く健在であることから、この人たちへの聞き取りを徐々に開始したところである。

今後は、さらに花卉栽培と行商の変遷に関する整理を進め、聞き取りによって行商の実態の復元を試みる予定である。それによって、汽水域という交通交易上の要地にあったこの地域における行商の位置づけを明らかにするとともに、単なる副業に留まらない行商の展開を考えていきたい。

注

- (1) 『八束村誌』は、島根大学の山岡栄一を中心とする研究グループが、1951年から4年半を費やして実施した大根島に関する共同研究の成果として刊行された。同書384〜386ページにその経緯が記録されているが、1951年5月に山岡が大根島で行った漁村調査が発端となり、島の現状分析により政治経済や教育のあり方を探求したいという地元の要請もあって、共同研究が開始されたとある。9名の分担執筆により、明治以降の八束村の自然・地理・歴史・産業・民俗・教育など広範囲にわたる言及がなされているほか、近世の村落構造や入会慣行、過剰人口に関する特論も掲載され、近現代における大根島の生活実態を総合的に知ることができる。
- (2) 以下の数値は、八束町全体の統計であるため、いずれも大根島と江島をあわせたものである。
- (3) 大根島の周辺地域では、東側対岸の弓浜半島一帯（鳥取県米子市・境港市）の人口密度がさらに高い数値を示している。1950年の統計では、1km²につき、境町の5515人を最高として、半島内の12町村のうち8町村が1000人を超えている。
- (4) 入会慣行は、漁業制度の改革に伴って、1951年3月に消滅した。新たに、各集落地先の共同漁業権が創設され、それ以外は自由操業区域とすることが定められた〔中国地域社会研究会 1956：229-230〕。

- (5) ソリコ舟は底が丸く、舳先が高いため、重心が高い。そのため、櫓を漕ぐと左右に揺れる。赤貝採取には、その揺れを利用し、ケタの爪で海底を掘り起こす〔樫村 2011:74〕。
- (6) 中浦水門は現在の江島大橋の南側に建設された。中海干拓事業では、大根島の対岸地域で予定されていた干拓と農地造成が、1989～1992 年の間に一部で完了していたが、減反政策や淡水化による環境破壊などの問題から、2000 年になって社会状況の変化を理由に干拓工事の中止が決定された。2002 年には淡水化事業そのものが中止となり、2009 年に中浦水門が撤去された。
- (7) 小笠原諸島・奄美群島・沖縄離島は日本復帰後に単独で地域立法を持った。

参考文献

- 有馬誉夫 2011『島根の観光レジャー史』私家版
- 樫村賢二 2011『里海と弓浜半島の暮らし——中海における肥料藻と採集用具——』（鳥取県史ブックレット 9）鳥取県
- 関西学院大学地理研究会編 1981『大根島』関西学院大学地理研究会
- 島根県企画室編 1955『大根島の実態調査——町村振興方策の一例として——』
- 伊達善夫・森忠洋・大竹久夫 1984「中海・宍道湖の自然特性——中海を中心として——」『農村開発』No. 13 島根大学農学部農山村地域開発研究調査室
- 中国地域社会研究会編 1956『八束村誌——科学的村誌への試み』関書院
- 米子鉄道管理局編 1963『米子鉄道管理局史』米子鉄道管理局